

モーリヤック

2025 年 1 月 19 日

M.Fujii

フランスのノーベル文学賞作家のモーリヤックの短編だったと思いますが、以下のような話がありました。

産業革命頃のあるヨーロッパの一地方都市、クリスマス・イブ(日暮れ後 1 時間)。

着飾った多くの人が家路を急いでいます。中には七面鳥を持って家路を急ぐ人も。

その地方都市の中心地、教会や噴水広場がある場所に、ひとり、ものすごくみすぼらしい、貧乏な服をまとった老人が腰をかがめ、倒れているように見えました。

着飾った多くの人々は、その老人を一瞥するものの、関わったら「自分の服が汚れる」「自分の家族と過ごす時間に間に合わなくなる」「誰かが助けるかもしれない」「もともとから乞食であったわけだし」「乞食になったのも自己責任」などと考えていたのか、誰も老人の傍に寄り、声を掛け、助ける人はありませんでした。

さらに 1 時間ばかり経った頃、家路を急ぐ人も少なくなっていました。

そこへ、ひとりのこれまた裕福でない若者がその乞食の老人を見かけ、傍に寄り、その老人に自身の薄い安物のコートを掛け、軽く抱きしめました。

すると、その老人は光輝き、その若者を照らし、その若者は満ち足りた幸福感を得るに至ったのです。

クリスマス・イブのお話です。

この話の「乞食」を自身の辛い体験、上手くいかない勉強、面白くない仕事と捉えると、この話は「大事にして抱きしめてみれば、苦しく、汚らしいと思ったことも、光り輝くものになります。」とも読めます。

また、家路に急ぐ多くの方は、自己中心的で、保身に走っており、得になることばかりを考えているとも読めます。

損することはその場では嫌ですが、最終的に人生に光をもたらすことがあります。

俗に言う「情けは人のためならず。巡り巡って己が為。」（情けを掛けるのは人のためではなく、いずれは巡って自分に返ってくるのであるから、いろいろな人に親切にしておいた方が良いでしょう。）とも読めるわけです。

こうした話が、このところ私の頭を かすめます。

いずれにせよ、上記のモーリヤックの話で言えば、出来れば“裕福でない青年”であるようになりたいと考えております。

以上